

北陸の縄文時代遺跡出土動物遺体が示すもの

平 口 哲 夫

はじめに

2014年12月13日(土)、白山市立千代女の里俳句館で開催された石川考古学研究会・富山考古学会合同特別例会『日本海側の縄文貝塚を探る』は、大規模な発掘調査によって膨大な考古資料が得られた富山県小竹貝塚、石川県三引貝塚、福井県鳥浜貝塚の調査成果を中心に、北陸の縄文時代遺跡出土の骨と動物遺体について発表するという構想で企画された。これら3貝塚は、いずれも低湿地遺跡であることから、動物遺体だけでなく植物遺体も多く出土している。この点、石川県真脇遺跡も同様な特徴を持っており、しかも3貝塚とは違った水域環境にあることから動物遺体組成も大きく異なっている。そこで筆者は、同特別例会において、小竹貝塚、三引貝塚、鳥浜貝塚に真脇遺跡を加えた4遺跡を中心に動物遺体の観点からコメントすることにした。本稿は、そのコメントを新たに書き直したものである。

なお、遺跡から出土した動物遺体(faunal remains)や植物遺体(botanical remains)は、主として人為的に遺跡にもたらされたものであるから「自然遺物(natural remains)」と呼ぶのは適切ではない。また、日本の考古学では、現在の動物の死体と区別するために動物性遺物を「動物遺存体」と呼ぶことが多いが、植物性遺物については「植物遺存体」ではなく「植物遺体」が通用している。したがって、用語の整合性という点では、「動物遺存体」ではなく、「動物遺体」を採用したほうがよいと思う。

1. 水域環境

水産動物遺体のなかでも貝類は、貝塚周辺の水域環境を如実に示すだけでなく、個体数を計算しやすい特徴を持っている。そこで筆者は、石川県の縄文時代中期の上山田貝塚と赤浦貝塚について、貝塚を中心とした半径500m圏内と半径4km圏内における海、潟、低地(標高10m未満)、山地・丘陵(標高10m以上)の占有率を算出し、貝塚出

土貝類の生息域出現率とを比較したことがある(平口1985)。生息域については、鹹水域(内海・内湾、内湾～外洋、外洋)、汽水域(潟・河口)、淡水域(河川・湖沼)に大別している。また、真脇遺跡については、貝塚ではないので貝類組成との比較はできないが、外洋性のイルカ遺体が哺乳動物遺体の大部分を占めていることから、上山田貝塚と赤浦貝塚の例に合わせて地形分布率を算出した。その結果、①イシガイやタニシ類などの淡水産貝類を主とする上山田貝塚では半径500m圏内に海や潟は無く、低地が88.4%を占め、半径4km圏内において海7.2%・潟7.4%・低地27.7%、②アサリなどの内湾性貝類を主とする赤浦貝塚では半径500m圏内に海は無いが、半径4km圏内において海30.1%・潟1.0%・低地26.7%、③外洋性の水産哺乳動物を主とする真脇遺跡では半径500m圏内において海4.8%・潟0%・低地32.6%、半径4km圏内において海41.4%・潟0%・海55.4%、という分布率を示すことから、500m・4km圏内における主要な水域と遺跡出土の主要水産動物遺体の出現率とは正の相関性があることが確認された。

この地形分析に用いた地形図は古地形図ではなく、現在の「2万5000分の1地形図」であるが、北陸においては、現在の地形図を縄文時代の地形分析に利用することができるということを、前述の分析結果は示している。このことは、遺跡の位置する地域の歴史・民俗資料を用いた民族考古学

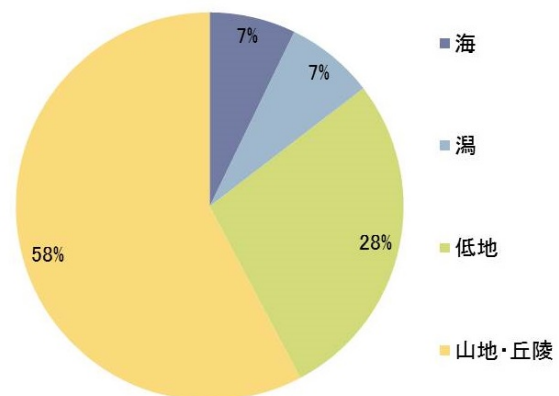


図1 上山田貝塚半径4km圏内の地形分布率

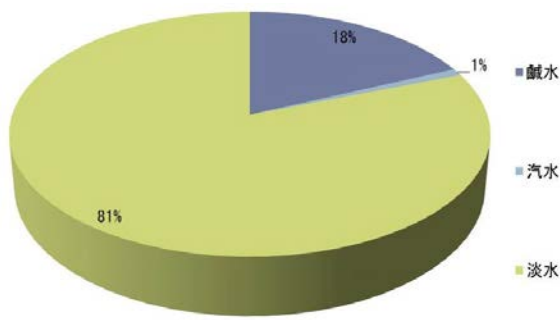


図2 上山田貝塚の水域別貝類組成率 (個体数)

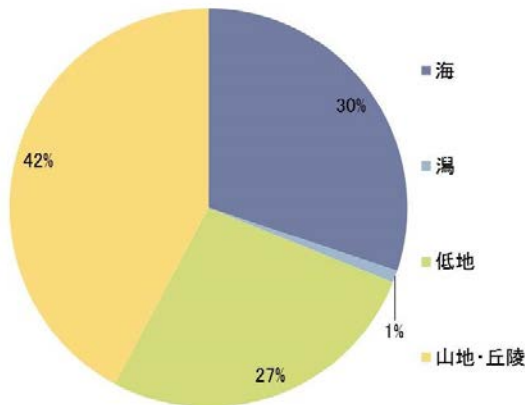


図3 赤浦貝塚半径 4km 圏内の地形分布率

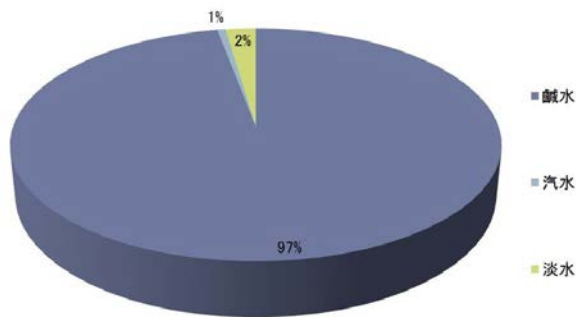


図4 赤浦貝塚の水域別貝類組成率 (個体数)

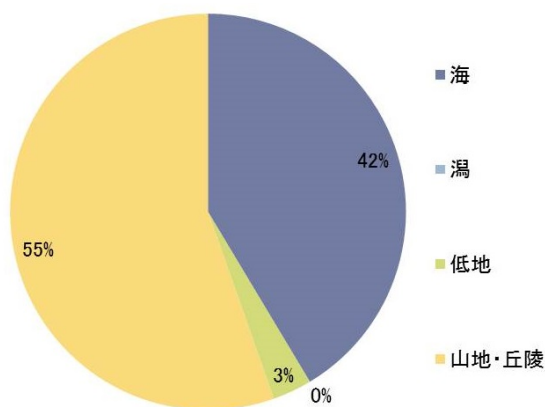


図5 真脇遺跡半径 4km 圏内の地形分布率

的な研究の有効性が高いことをも示している。実際、真脇遺跡のイルカ漁については、1838 (天保9) 年に描かれた『能登国採魚図絵』などが参考になり、シカ猟が狩猟活動の中心であった三引貝塚の周辺地域は、後世においてもシカの追い込み猟が行われていた土地柄であった (平口 2005)。また、富山県桜町遺跡から出土したサケ・マス類については、この遺跡周辺が江戸時代に小矢部川流域における代表的なサケ・マス産地であったことから考察されている (小島 2001)。

さて、小竹貝塚、三引貝塚、鳥浜貝塚については、前述のような数値化した地形分析は行われていないが、地形図における貝塚の位置によって直感的に水域環境の概要を見て取り、貝塚の貝類組成との整合性を把握することができる。富山湾の奥部に位置する小竹貝塚は、海岸までの直線距離が約 4km で、出土貝類のほとんどが汽水産のヤマトシジミであることは、この貝塚が営まれた縄文時代前期中葉～後葉において小竹貝塚周辺の低地に汽水域が大きく広がっていたことを示している (町田 2014)。縄文時代前期初頭の三引貝塚は七尾湾の西湾最奥部に位置し、貝類組成においてハイガイ・サルボウガイ・ヤマトシジミの3種が主要な位置を占めているが、貝類全体としては内湾性主鹹貝塚の特徴を示している。三引貝塚から海岸までの直線距離は 1.3km、遺跡を中心に半径 2km の円を描くと、貝塚形成当時、深い入り江をなしていた低地はその圏内におさまる。潮間帯～水深 10m の泥底に棲むハイガイ、潮間帯上部～水深 20m の砂泥底に棲むサルボウ、汽水域に棲むヤマトシジミが主体をなす貝類組成には、この圏内の水域環境が強く反映している。現在では伊勢湾以南にしか生息していないハイガイは、七尾湾の南湾に面する赤浦貝塚 (縄文時代中期) では出土していないので、この貝が三引貝塚から多数出土しているということは現在や縄文時代中期よりも温暖な前期初頭に三引貝塚が形成されたことによるのであろう (平口 2005)。鳥浜貝塚は三方湖に注ぐ鰯(はす)川と高瀬川の合流点付近にあり、湖岸までは 1km 以下の近距離に位置し、海岸までの直線距離は約 5km である。この水域環境を反映して、鳥浜貝塚の貝類組成はトンガリササノハ・イシガイ・マツカサガイなどの淡水産貝類が圧倒的に多く、汽水産のヤマトシジミもかなり出土しているが、海産貝類はごく少ないのが特徴的である (藤井・高山 1979)。

2. 捕獲・解体・分配・利用・廃棄

真脇遺跡の場合、イルカ遺体が最も多く出土した縄文時代前期後葉～中期前葉の遺物に基づき、イルカの捕獲から解体・分配・利用を経て廃棄に至る過程を検討した。1986年に真脇遺跡の発掘調査報告書が刊行されてから、イルカの上腕骨ペアマッチングや椎骨連結資料の個体別分析を試みたところ、それらには同一個体をなすものが極めて少ないことが分かり、捕獲・解体後の残骸をまとめて一箇所に捨てたわけではないと考えるに至った。また尾椎後位～中位の椎骨連結資料には、大まかに肉を剥ぎ取ったあと、持ち運びやすいように分断する際について解体痕の例があり、強力な筋が張り付いた連結椎骨を分断するのは容易な作業ではなく、しかも廃棄場は解体の行われた浜辺の近くに位置することから、この分断作業は捨てるためではなく、まだ有用性のある連結椎骨を分配する目的で行われたと見たほうがよい。したがって、イルカ遺体の出土状況から1回のイルカ漁で何頭のイルカを捕獲したかを推定するのは無理だということになり、現時点では、いくつかの仮定に基づき、シミュレーションを試みるほかない。

『能登国採魚図絵』に記されたイルカ漁は、漁期が来ると、舟10隻のうち、3ないし4隻に網を積み、その網を積んだ舟には1隻につき6ないし7人が乗り込んで、ふだんから魚見舟として3里ばかり沖に出ている。残り6ないし7隻の舟は、1隻につき3ないし4人ほど乗り込む手はずで陸に待機している。縄文時代の場合、イルカ漁に網が用いられたかどうかは明らかではないが、10隻の舟に5人ずつ乗り込んだとすると、1船団50人ということになる。仮に5集落から10人ずつ成人男性が出向いて舟に乗り、30頭のイルカを捕獲、各集落に等分したとすると1集落につき6頭分ということになる。カマイルカ成熟個体の平均体重は約100kg、その可食部分（筋肉・内臓）は約65kgである。1集落の人口が平均30人ならば、1人当たり肉・内臓量は13kg（65kg×6÷30）という計算になる。しかしながら、漁に参加しなかった集落の人々にも分配したならば、真脇縄文人1人当たりが口にする肉量はもっと少なくなってしまう。しかもイルカは1年のうちの限られた季節（カマイルカの場合は「藤の花の咲くころ」）に

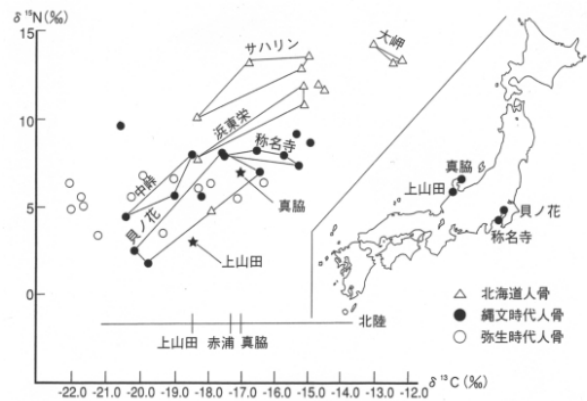


図6 真脇人骨等の炭素・窒素安定同位体分析値

しか回遊してこない。（平口 2005b, 2006）

真脇遺跡出土人骨1試料（縄文時代前期末～中期初）、赤浦貝塚出土人骨1試料（縄文時代中期～後期初）、上山田貝塚人骨1試料（縄文時代中期）について炭素・窒素安定同位体分析を行なった結果、各遺跡の水域環境・動物遺体組成がかなり異なっているにも拘らず、炭素・窒素安定同位体比にさほど大きな差は認められず（赤浦人骨については炭素同位体分析のみ）、いずれも本州海岸部の縄文人骨グループにおける炭素・窒素安定同位体比の範囲内にあった。この分析結果は、前述のシミュレーションに合致するものである。

真脇遺跡からは植物遺体や木製品も多数出土しているが、クリ・クルミ・トチ・ドングリなどの堅果類はあまり出土していない。クリ材を大いに利用しているのであるから、その実も大いに食べたはずである。堅果類があまり出土しないのは、イルカ骨とは廃棄場が異なっていたからであろう。逆に、富山県南太閤山I遺跡では、縄文前期前葉の層から膨大な量のオニグルミが発見されたが、動物遺体はあまり多く見られない。食生活の復元にあたっては、廃棄場の性格を考慮して行う必要がある。（平口 1990）

3. 三引遺跡のシカ猟と鹿字の地名

真脇遺跡、朝日貝塚、赤浦貝塚、上山田貝塚については個体数法により哺乳類組成を比較し（平口 1986・1992）、三引貝塚では個体数法による哺乳類組成がまだ把握されていないので、破片法による暫定哺乳類組成を上記4遺跡の個体数法による哺乳類組成と比較したことがある（平口 2005）。

まず陸獣類と海獣類を百分率で比較すると、三

引 91.5%:8.5%、真脇 6.9%:93.1%、朝日 31.6%:68.4%、赤浦 82.1%:17.9%、上山田 90.2%:9.8%となる。すなわち、哺乳類全体に占める陸獣類の比率という点では、三引貝塚は上山田貝塚に近似して 90%を超え、海獣類が 90%を超える真脇遺跡とは対照的である。

つぎにシカとイノシシの出現率を比較すると、三引 76.0% : 10.3%、真脇 3.1% : 2.2%、朝日 7.9% : 21.1%、赤浦 35.7% : 32.2%、上山田 14.6% : 19.5%となり、三引貝塚ではシカの出現率がきわだって高く、同じ七尾湾に面する赤浦貝塚でシカとイノシシが共に 30%台を占めているのとは大きな違いを見せている。

イヌなどの小型陸獣類は、三引 5.2%、真脇 1.6%、朝日 2.6%、赤浦 14.3%、上山田 56.1%となる。上山田貝塚で小型獣類が高率を占めるのは、ムササビ 19.5%を筆頭にタヌキ 9.8%などイヌ以外の小型陸獣類が多く出土していることによる(松井・平口 1979)。また、赤浦貝塚の場合、発掘調査の前に貝塚部が破壊されたため、表採資料によるほかなく、哺乳類資料の個体総数も他の遺跡に比べて少なく合計 28 を数えるにすぎないので、統計的な信頼度は低い。すなわち、上記4遺跡のうち、小型陸獣類の中でイヌが主体を占めるということが明確なのは三引遺跡だけなのである。

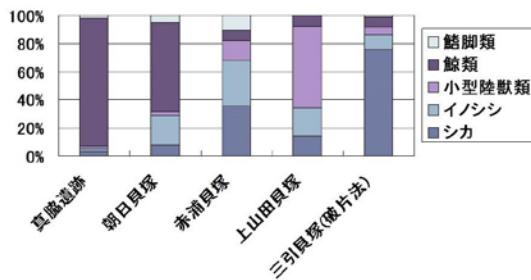


図7 北陸縄文時代5遺跡の哺乳類組成

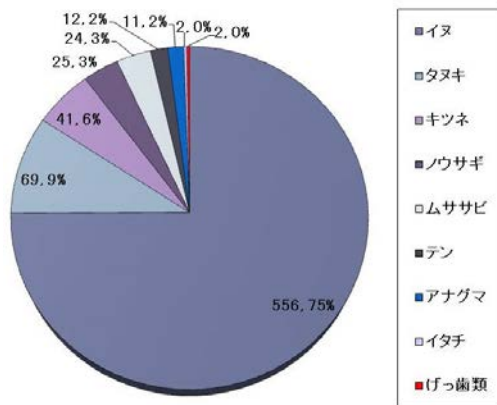


図8 三引貝塚の小型哺乳類組成



図9 三引遺跡出土のイヌ頭蓋骨左側面 (標本番号166、若獣、♂?)



図10 三引遺跡出土のイヌ頭蓋骨背面 (同上)



図11 三引遺跡出土のイヌ頭蓋骨口蓋面 (同上)

最後に鯨類と鯨脚類の出現率を比較すると、三引 7.5%:1.5%、真脇 90.9%:2.2%、朝日 63.1%:5.3%、赤浦 7.1%:10.7%、上山田 9.8%:0% (ただし、これは第4次発掘調査出土資料によるもので、第1次発掘調査出土資料には鯨脚類が含まれている)。資料的に問題のある赤浦貝塚以外は、海獣類の主体は鯨類が占めている。

哺乳類組成が示すように、三引貝塚の狩猟活動の中心はシカ猟である。陸獣類の中ではシカ・イノシシに次いで多数出土しているイヌについては、シカ猟との関連で興味深い事実が指摘されている。三引貝塚出土のイヌの骨にはほとんど解体痕が認められないことから、当貝塚においてもイヌが食用としてではなく狩猟用として飼われていたと考えられる。ところが、三引貝塚の場合、イヌの裂肉歯や犬歯の損傷が宮城県気仙沼市田柄貝塚出土の縄文時代犬に比べて著しく少なく、歯の生前の脱落も少ないようである。この原因として、三引貝塚の狩猟がシカ猟を主としていることから、イノシシ猟が盛んに行われた田柄貝塚などに比べて狩猟中に歯に損傷を受ける危険性が少なかったであろうということが考えられる（茂原・平口・桜井 2004）。

ところで、能登には鹿島(かしま)、鹿泊(しどまり)、合鹿(ごうろく)、鹿磯(かいそ)、鹿頭(ししず)、鹿波(かなみ)、鹿上(しかがみ)、鹿路(ろくろ)、鹿島台(かしまだい)、鹿渡島(かどしま)、鹿島路(かしまじ)、鹿首(かしくび)など鹿の字のつく地名が多く、しかも、三引貝塚の位置する中能登に集中している（図 12～17）。

江戸時代の文書『岡部日記』（1776）や『多田家文書』（1867）には、農作物に害を与えるシカ・イノシシを駆除するために柳田村が鉄砲貸与を願い出たとの記録がある。また、明治・大正期のシカ



図 13 鹿泊(鳳珠郡能登町布浦)



図 14 鹿首(羽咋郡志賀町矢駄)



図 12 鹿磯(輪島市門前町)



図 15 鹿頭(羽咋郡志賀町)



図 16 鹿波(鳳珠郡穴水町)



図 17 鹿渡島(七尾市鵜浦町観音崎)

猟・シカ目撃談が『能都町史』(1980)、『鹿島町史』(1982)、『能登島町史』(1982)などに掲載されている。近年、里山の荒廃などが原因してシカ・イノシシの生息範囲が広がり、能登でもこれらの野獣が目撃されるようになった。

文献・地名・動物誌をもふまえて環境・民族考古学的な視点から縄文時代シカ猟について研究を深めることが今後の課題である。

文献

藤井昭二・高山茂樹 1979 「軟体動物」『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 1』福井県教育委員会：167 - 169.

平口哲夫 1985 「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境—上山田貝塚の立地分析を中心に—」『石川考古学研究会々誌』28：57 -

78.

平口哲夫 1986 「富山湾における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境」『大境』10：51 - 68.

平口哲夫 1990 「真脇・赤浦・上山田人骨の炭素安定同位体比についての考古学的解釈」『金大考古』18：21 - 29.

平口哲夫 1992 「北陸における海獣類出土遺跡の環境と動物遺体組成」『日本海セトロジー研究』2：1 - 8.

平口哲夫 2005 「三引遺跡における縄文時代前期初頭の狩猟・漁撈活動—海生哺乳類、特にイルカ遺体を中心に—」『七尾市三引遺跡V』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター：53 - 62.

平口哲夫 2005b 「イルカ漁に生きた真脇の人々」『日本文化財科学会会報』50・51：26 - 39.

平口哲夫 2006 「イルカ漁に生きた真脇の人々—真脇縄文人はイルカにどの程度依存したか—」『石川県能登町真脇遺跡 2006 史跡真脇遺跡整備事業に係る第7~9次調査概報』147 - 158 (平口 2005b を再編集したもの).

小島俊明 2001 「かつて小矢部川をサケは遡った」『桜町遺跡調査概報』学生社：66 - 67.

町田賢一 2014 「位置と環境」『小竹貝塚発掘調査報告—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財調査報告X— 第1分冊』富山県文化財振興団埋蔵文化財調査事務所：17 - 22.

松井章・平口哲夫 1979 「動物遺体」『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員：100 - 121.

茂原信生・平口哲夫・櫻井秀雄 2004 「三引遺跡出土のイヌならびに他の中・小型哺乳類」『田鶴浜町三引遺跡Ⅲ (下層編)』石川県埋蔵文化財センター：539 - 332.